

昭和35年4月2日第3種郵便物認可

(A版)

7月31日(水曜日) 30日発行

©東京スポーツ新聞社2013年
第17213号 日刊(日曜を除く)

www.tokyo-sports.co.jp

東京スポーツ新聞社
東京都江東区越中島2丁目1番30号
〒135-8721
編集(03)3820-0831
販売局(03)3820-0811
広告局(03)3820-0821
関西支社 堺市堺区松原大和山通3丁目132番地
中部支社 名古屋市北区金城4-3-19
西部支社 福岡市中央区天神2の14の8

振替口座 00120-2-93236

お年寄りの孤独死増加で注目

遺品整理士

仕事現場に密着

この猛暑で、熱中症にかかったお年寄りの孤独死も増えている。亡くなられた方の親族は、葬儀後、故人の持ち物の整理をしなければならぬ。高齢化に加え、単身生活者の増加した社会では、遺品整理を代行業者に依頼するケースが増えた。そこで「遺品整理士」という職業が生まれ、注目されている。故人の部屋をキレイにすると同時に、遺品ごみみを丁寧に処分する仕事だ。その現場に密着すると「自宅の畳の上で死ぬのが一番」との考えが、崩れてきていることが分かった。



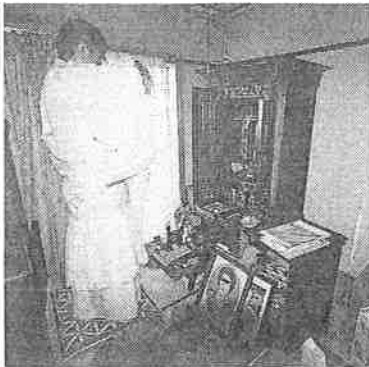
身ざれいに生活していた人でも、これだけ多くの物が出てくる

ツキーだった。1人で死んだら迷惑だろ。そろそろ老人ホームに入るよ。『畳の上で死にたい』なんてよく言うけど、今は違ふ。生きるのも死ぬのも難しいな』と語る。女性の部屋からは聖徳太子が描かれたお札が何枚か出てきた。稲山氏は交渉して男性と現行紙幣で交換した。

稲山氏は「整理士の中には『宝探し屋』もいる。200万円の小切手を換金した業者や、1万円札の束をネコババした業者はがんになって死んだり生死をさまよったりしている。悪いことばかり多い」という。高齢者の部屋で仕事をするだけに、依頼者にはいつも「注意」をする。通帳の記録と部屋の現金の数字を合わせてもらっているのだ。「老人はお金を銀行から引き出した後で、どこに置いたか忘れる。また引き出す。1か月で30万円を3回出した人もいた」(同)

畳の上で死にたいと言っけど…

株式会社「フェイス」代表で遺品整理士の稲山修氏(59)が、千葉県の古い団地の居間で心筋梗塞で亡くなった女性(69)



作業開始前に仏壇の「魂(たま)抜き」をする

の部屋を掃除した。女性の兄(81)は葬儀を終えると、ネットで業者を探して依頼した。兄は「昨年、夫を亡くした妹は独り暮らしで体調が弱っていて、介護保険の申請を頼んだ。役所の人から話をするため部屋を訪れて、死んだ翌日に発見してくれた。業者の世話になるのは初めてのだから、分からないことだらけだった」と疲れた表情で語る。この男性もまた高齢の独り暮らし。「妹はすぐ見つかってラ

1千万円単位で現金が出てきた

ときには1000万円単位で現金が出てくることもある。一方で、金目のものが一切なく、仏壇、位牌、遺影、遺骨だけが残されているケースも。薄情な親族が増えたのだろうか。「せめて小さい位牌だけでも持ってほしいよ」と稲山氏は嘆く。

整理士も存在する。一般社団法人「遺品整理士認定協会」の小根英人副理事長は「荷物を根こそぎリサイクルショップに運んで、残りを山に不法投棄する者がいる。山の持ち主が土地を売ろうとしたときに初めてゴミ山に気づく」と明かす。また、一般の人は遺品整理の料金相場など知る

(塚田賢慎)